

ワーキングデイで絵画指導の役割を見つけた若年性認知症の女性の事例

鎌倉市

地域密着型通所介護

ワーキングデイわかば

管理者 稲田秀樹

1. はじめに

ワーキングデイわかばは、機能訓練や生活意欲の向上を目的に、公園の清掃や花壇の管理、空き家や高齢者宅の草刈りなどの地域貢献を行うデイサービスである。若年性認知症の方から高齢の方まで、幅広い年齢層の方が利用している。メンバー（利用者）の約9割が認知症を伴っている。今回はそのワーキングデイわかばを利用したことが契機となり、屋外活動に参加するかたわらで他のメンバーに絵画指導を行うことで、生活意欲を取り戻した若年性認知症の女性（60歳）の意欲向上までの経緯について報告したい。

2. 事例や取り組みの紹介

2015年、Aさん(61歳)は59歳の時にアルツハイマー型認知症の診断を受けた。彼女は大きな賞をとったこともある抽象画の女流画家である。画家としてまだ現役の頃だった。

2017年8月、ワーキングデイわかばの利用がはじまった。当初は病気に対する不安が強く見られた。スタッフの絵画指導を頼むと嫌がらずに応じたが、途中から作品を黒い色で塗りつぶしてしまった。ある日の帰りの送迎車中、彼女は私にこう尋ねた。“私はいつまで生きていられるのかしら。あと1~2年くらいかな…”若年性認知症といっても昔と違って診断から終末までの経過は長くなっている。1~2年ということはない、私は正しい情報を伝える必要を感じ、きっぱりと、診断から10年、15年、いや20年という人もいますよと伝えた。彼女はずいぶん驚いていた。

それから彼女は変わった。心のつかえがとれたように表情も生き生きしてきた。自宅でも草刈りは良くやったというので、公園の草刈りを担当してもらった。またスタッフだけでなくデイに来ているメンバーの絵画指導も頼んだ。絵を描いたことのない高齢の女性が、Aさんの手にかかる「楽しいわ」を連発した。彼女は否定をせず、ポイントを押しさえてほめる指導方法だった。

2018年5月には地域のイベントで子供たちに大きな紙に自由に絵を画く指導をしてもらった。大好評だった。彼女は心から「自由に」「自分の気持ちをぶつけてごらん」「うまく書こうとしなくて良いの」と子どもたちに語りかけていた。同じ2018年5月、ワーキングデイわかばで取り組んだ陶芸の作品展が鎌倉市の小町通りで行われた。彼女自身、絵を画かなくなって久しぶりの作品展への出品となった。夫と二人で展示作品を見る彼女の眼はいきいきとしていた。

3. 考察

Aさんが病気の予後を1年から2年と思いこんだのにはそれなりの理由があった。まずは根治薬がない病気であること。そしてもう一つは、テレビから流れてくるショッキングな情報、それらは彼女にこの病気に固有の絶望感を植え付けただろう。またAさんが気持ちを前向きに持ち直し

て、絵画指導を楽しみに思うようになったのにはもうひとつ理由がある。日々行なっている地域貢献活動を通じて、登録者の約9割を占める認知症のメンバーもそうでないメンバーも、和気あいあいと過ごし、誰にでも気さくに話しかけられる関係性が、様々な障害を乗り越える力となったのではないかな。

4. おわりに

平成30年4月、ワーキングデイわかばをスウェーデン国王王妃らが訪問した。そこでAさんは自ら進んで国王王妃に英語で挨拶をした。また公園の遊具を拭いていると小さな子供を連れた母親から「いつもありがとう」と声をかけられることがある。誰かの役に立っているという思いは、生活意欲を高め、自分の生きる価値を確認することである。それは自己実現につながる道でもある。Aさんが他のメンバーや子どもたちに絵画指導をすることで、彼女が一貫して追求してきたアートという自己実現の道へ、再び歩み出していると感じる。彼女には病気からくる手の震えと、失行や記憶障害などの様々な障害があるが、しかし今でも彼女は自分を画家だと言う。それは彼女のアイデンティティー(自己を確立する要素)でもある。



公園の草刈で草刈に汗を流す



公園でブランコを拭く Aさん



デイのメンバーに絵画指導を行なう



地域のイベントで子供に絵画指導



小町通で行なわれた陶芸の作品展に出品



スウェーデン国王王妃の訪問に英語で挨拶